R5年の自己評価

2023 年度　幼保連携型認定こども園教育・保育要領に基づく自己評価

作成日	令和6年4月8日
法人名	園　名
学校法人織田学園	おだ認定こども園

まとめ　　全体平均　3.77

第2章第2節 乳児期の園児の保育	担当教諭・関係する職員、園医など連携し、個々に合った対応を心掛けている。 保護者の気持ちに配慮して、対面での会話を大切にし、会えた時はその日の様子などを伝えるようにして、安心感を持って預けられるようにしている。早番から１７時以降の預かりの子も多いので、継続して体調面等配慮して見ていく。
第2章第3節 満1歳以上満3歳未満の園児の保育	自分でできることが増えてくるこの時期に５つの領域を生活と遊びにおいて総合的に見ていく事の難しさがあるが、個々の育ちや家庭環境を加味しながら、複数の保育教諭で担当するため、援助の仕方等担当者の情報共有を大事に努めていきたい。
第2章第4節 満3歳以上の園児の教育及び保育	各学年でサークルタイムが定着し、子ども達は自分で考えた事を言葉で伝えようとする意識が高まって来た。５領域が総合的に絡み合って育っていくプロセスを大事にしていくことを職員間で共有できた。日頃からジブンゴトとして様々なことを考えると共に、仲間との関わりを通して仲間の中の一人としての自覚が多くの園児の中に見られた。
第2章第5節 教育及び保育の実践に関わる配慮事項	保育教諭の応答的な関わりを重視し丁寧な働きかけを行っている。年度初めは職員間の連携が十分に取れていない場面もあり、改善を繰り返し保育教諭間での信頼関係が築けるようになってきた。次年度は年度初めに保育教諭間で協力し園児の発達や保育環境等の引継ぎに対応できるように移行期の仕事の組み立てに留意したい。
第3章 健康及び安全	今年度は、コロナ禍が終息し、以前の日常が戻ってきたことで、疾病への抵抗力が弱い年齢の園児は感染症などの病気にかかりやすい状況でもあったが、保育の中で常に心身の状態を細かく観察し、発熱や体調の変化に速やかに対応できていた。
第4章 子育ての支援	幼保連携型認定こども園の強みを最大限に生かせる事業として地域の子育て支援は創意工夫し取り組んでいる、赤ちゃん食堂を開始して２年目となり、出産後の子育て支援の一つのあり方として定着しつつある。保護者への食事の提供は忙しい子育て中にホットできる時間となり子育ての活力となっているようである。地域に開かれた園として更に何ができるか模索していきたい。
第5章 職員の資質向上	本園の理念の理解を深めるため、人間関係をテーマとして昨年度に引き続き東洋大学の高橋先生を講師としてビデオ研修を実施した、また個別的配慮児について多摩市発達支援室田中心理士を講師とし具体的なケースを取り上げて園児のアセスメントや記録や指導計画について学べたことは大変良かった。しかし幼児の課題が中心となり３歳未満児の課題に具体的な方策が示すことができなかったため、来年度は３号認定職員が集合型の研修が実施できるよう体制を整えていく。
総合	令和５年度５月から新型コロナウィルス感染症が５類感染症に移行し、園の生活や行事等も状況を把握しながら、以前の形に戻し始めた。このことにより保護者と一緒に園児の成長を喜び合える場面が多くなったことで本園の教育と保育活動の理解が昨年度より深まったと実感している。保育の質の向上を目指し、３年計画で人間関係の領域にスポットを当てて、人との繋がりが育つ保育環境や保育教諭の関わりについて実践を積んで来ている、次年度は、その実践の成果を視覚化し園全体の職員や保護者と共有できるようにしたい。組織として人材育成に取り組んでいるが形として明示しにくいところでもあり課題でもある。

データ表

内容	項目数	平均
「乳児保育」	15	3.33
「3歳未満児保育」	32	3.41
「3歳以上児保育」	53	3.71
「教育保育の配慮事項」	13	3.46
「健康・安全」	29	4.48
「子育ての支援」	16	4.06
「職員の資質向上」	9	3.89
計	167	3.77

